

## ボイオーティア戦争

——前三七五年の平和までの政治過程——

はじめに

前三七九年の民主派亡命者らによるテーバイ解放はボイオーティア戦争の始まりとなった。アテーナイの参戦は戦火をボイオーティアから本土周辺海域へと拡大していく。戦争は決定打を欠き、消耗戦の様相を呈するようになる。戦争の継続を負担と強く感じていた各国は前三七五年に平和条約を締結するが、主要な当事者であるテーバイはこの平和への参加を拒否し、スパルタ・アテーナイ双方ともに相手側による条約侵犯を理由に再び戦争に突入していく。このようにギリシア諸国は前三七五年に安定した平和を築くのに失敗してしまった。しかしスパルタにおける党派の反目と相反する外交戦略、アテーナイにおけるカッリストラスの平和構想、アテーナイ側からの働きかけ、スパルタとアテーナイの協調による共通平和は前三七五年の平和と前三七一年の平和の連続性を示している。本稿においては前三七五年の平和に至る政治過程を探求し、ボイオーティア、アテーナイ、スパルタの党派と外交戦略の抗争を探求してみたい。

ボイオーティア戦争の勃発と平和条約締結に至る政治過程

前三七九／八年のペロピダスら七名の民主派亡命者によるテーバイ解

中井義明

放はボイオーティア戦争の始まりとなった<sup>①</sup>。スパルタはペロポネソス同盟軍を派遣してこれに対抗しようとすると共に、テスピアイにハルモステスを置いて拠点の確保とテーバイの監視・抑制に努めたのである<sup>②</sup>。しかし、前三七九年にクレオンプロトス、前三七八年と前三七七年にはアゲーシラーオスを派遣したにも関わらず決定的な勝利を収められなかったばかりでなく、ハルモステスのポイビダスは敗死してしまった<sup>③</sup>。

最初はテーバイへの支援に消極的であったアテーナイもスポドリ阿斯事件を契機にテーバイ支援に積極化し、海上でも攻勢に出るようになった<sup>④</sup>。第二アテーナイ海上同盟の結成についてクセノポンは沈黙しているが、ディオドロスはカッレアスがアルコンの年にキオス、ビュザンティオン、ロドス、ミュティレネ他エーゲ海域島嶼部の諸都市がアテーナイを盟主とする海上同盟を結成したことを記述している<sup>⑤</sup>。

海上同盟結成がアテーナイの民会で決議されたのはナウシニコスがアルコンの年の第七ブリュタネイア、即ち前三七七年二／三月であった<sup>⑥</sup>。前三七七／六年度に海上同盟が結成されたとするディオドロスの記述に誤りがあるが<sup>⑦</sup>、海上同盟結成の経緯と目的、その広がりについては間違いないと思われる。アテーナイが海上同盟への参加を諸都市に呼びかけたというディオドロスの記述は碑文と矛盾しない<sup>⑧</sup>。碑文は海上同盟への参加を提唱する使節団をテーバイに派遣することを明記している<sup>⑨</sup>。その目的が「共通の自由」のためであったというディオドロスの指摘

はアリストテレスの提案に示されている海上同盟結成の目的と整合している。<sup>⑪</sup>

海上同盟結成後アテーナイはエーゲ海域において攻勢に転じ、スパルタは防戦のために同盟国に対する政策の転換を余儀なくされたのである。<sup>⑫</sup> スパルタはアテーナイの穀物交易を脅かそうとしてアテーナイとナクソスにおいて海戦を戦い、甚大な損失を被って敗走している。<sup>⑬</sup>

前三七五年に入るとスパルタは深刻な戦局に直面していた。クレオンプロトスがテーバイ・アテーナイ連合軍のためにボイオーティアへの侵攻を阻止されたばかりでなく、ボイオーティアにおいては数的に優勢であったにもかかわらずオルコメノスの戦いでスパルタはテーバイに敗れている。<sup>⑭</sup> ニコロコス揮下の艦隊はケルキュラをアテーナイに奪われ、アリュゼイアの海戦で敗北を喫したのである。<sup>⑮</sup>

戦線も拡大していた。ティモテオスの遠征によってスパルタはイオニア海でアテーナイとの対峙を余儀なくされると共に、テーバイによるポークス遠征によってポークスに大部隊を派遣せざるを得なくなっていた。<sup>⑯</sup> スパルタの継戦能力は限界に達していたのである。イアソンを抑制する為の介入を求めるバルサロスの要請に応えることが出来なくなっていた。<sup>⑰</sup> 同時にスパルタの戦争指導に対する同盟諸国の不満は高まっていた。<sup>⑱</sup>

平和へのイニシアティブが戦争に疲弊していたアテーナイから発していたのか<sup>⑲</sup>それともギリシア人傭兵を確保する為にギリシアでの戦争終結を望むペルシア王がイニシアティブを行使したのかは別として、前三七五年の平和条約締結に際して重要な働きをしたのはアテーナイである。前三七一年の平和条約締結ときわめて類似している真偽の程は確かでないが、ボイオーティアを代表してテーバイが誓約するという主張に反対したのはスパルタではなくアテーナイであった。<sup>⑳</sup>

アテーナイが平和条約締結に向けて積極的に関与したのには次のよう

な事情が考えられる。スポドリアス事件以降アテーナイは艦船建造に着手して海軍力の増強を図り、ティモテオスの指揮下に六〇隻の艦隊をイオニア海に派遣していた。<sup>㉑</sup> 要衝ケルキュラを奪取し、アリュゼイア海戦でスパルタを破り、イオニア海での優勢を維持していたにもかかわらずアテーナイはスパルタとの戦いを負担と感じていた。<sup>㉒</sup> イオニア海で遊弋中の艦隊は巨額の資金を要求し続け、これに応えるべくアテーナイは市民に臨時財産税を課したが、アテーナイの戦争努力によって最大の利益を享受していたテーバイは同盟分担金を納付していなかった。<sup>㉓</sup> 前三七五年の平和は、クセノポンによれば、増大する戦費負担に耐え切れなくなったアテーナイが使節をスパルタに派遣して実現したものであった。<sup>㉔</sup>

### ボイオーティアにおける状況の変化

バックラーによると、前四世紀のボイオーティアは覇権をめぐって対立しあうテーバイとプラタイアやテスピアイ、オルコメノスの主要四都市と、オルコメノスのような都市の近隣にありその影響力の下に置かれていたカイロネイアやコーパイ、アクライビア、レバディア、ハリアルトスなどの小都市、町邑、村落という階層性を有していた。<sup>㉕</sup> これらの小共同体は外部からの大規模な侵入による破壊に晒され、ボイオーティアの諸都市に駐留する部隊の襲撃にも晒されていた。<sup>㉖</sup> それ故これらの小共同体の住民はテーバイを中心とするボイオーティア連合の動きを支持していたのである。加えてこれらの小都市はバックラーによるとかつてアスクラをテスピアイが破壊したように主要都市による支配と併合に対する恐れを抱いていた。

同時に各都市の内部では親スパルタ派と反スパルタ派(親アテーナイ派)が対立していた。かつてトゥキュデデスは「スパルタ人が同盟諸

国を貢税負担国の地位に留めることによってではなく寡頭政を通じて同盟諸国に対する覇権を行使している」と指摘したが、そのような状況がボイオーティアにおいて長く続いてきた。テーバイ民主派によるクーデタはそのようなスパルタ支配に対する挑戦であり、テーバイを中心とするボイオーティア連合の構築を通じてボイオーティアにおけるスパルタ支配を崩壊させようとするものであった。

ボイオーティアの状況についてクセノポンは「名望家政治〔*tyranteia*〕のために諸都市には親スパルタ派が権力を掌握していて、テーバイとテーバイを拠点とする民主派の圧力に抗してスパルタの支援を強く求めていたと述べている。テーバイの南東にあるタナグラでは親スパルタ派のヒュパトロス派が政権を手に収めていた。アテーナイと伝統的に親密な関係にあるプラタイアはテーバイとの敵対関係からスパルタとは友好的な関係を保っていたと史料は伝えている。スパルタの対テーバイ戦の拠点を提供しスパルタ人ハルモステスとその強力な部隊が駐屯したテスピアイはテーバイの圧力を直接被っていたが、市内では親スパルタ派と民主派が敵対しておりアゲーシラーオスの第二次遠征の際には内乱にまで発展していたのである。」

ボイオーティアの政治的統合とボイオーティア諸都市の従属領 *synteleia* を推進する民主政テーバイの脅威に直接晒されていたプラタイアやテスピアイ、オルコメノスなどの諸都市では自由と自主を守る為にあテーナイやスパルタなどの外部諸勢力と結びつき、これに抗しようとしたのである。同時に、テスピアイのように、寡頭派と民主派が厳しく対立し、一方はスパルタとの連携を追求して自派の政治的利害を固守しようとしたのに対して、他方はテーバイと結びつき、テーバイのボイオーティア統合の動きに連動することによって都市内部の権力闘争に勝利しようとしたのである。

テーバイではメローンら民主派のクーデタによってアルキアスやレオンティアダスらの寡頭派は一掃され、ある者は殺され、残りの者は追放されたのである。その結果、テーバイ内部においては政治勢力としての寡頭派は存在しなくなってしまうていた。バキザンによると、テーバイ民主派の目的はスパルタと親スパルタ派をボイオーティアから駆逐し、オルコメノスやテスピアイなどの諸都市を従属領化することであった。そのテーバイ民主派にとって寡頭派亡命者の帰国と指導者の処罰を求めるスパルタとは妥協の余地はなかった。

#### ボイオーティア戦争に対するアテーナイの対応

アテーナイがテーバイとの連携を深めていく背景にボイオーティア支派が存在していた。メローンらテーバイ人亡命者のクーデタに協力し、軍を動員してカドメリア攻略に参加した二人の将軍はこのグループの一員だったと思われる。第二アテーナイ海上同盟の結成を提案するアリストテレスの法案はアリストテレス本人の他にピュランドロスとトラシユブローロスを使節としてテーバイに派遣することを提案している。そしてローズとオズボーンによれば、ピュランドロスとトラシユブローロスに親テーバイ派の人物であった。ピュランドロスはビューザンティオンへの使節にも選ばれており、カルキスとの同盟の提案者である。トラシユブローロスはペロポネソス戦争末期以来アテーナイの指導的人物であった。スポドリアス事件を利用してスパルタに対する市民の不信感を掻き立て、テーバイ支援と対スパルタ戦へと世論を誘導していったのはこのグループである。

しかし、テーバイ支援と対スパルタ戦に慎重な意見も存在していたようである。クレオンプロトスの遠征軍がエレウテライを經由してボイオ

ーティアに入っていくのを目にして慎重派がにわかに力を得、テーバイに協力した二人の將軍を処罰させたのは彼らであった。コリントス戦争時とは状況が異なり、地峡部を扼するコリントスが防波堤の機能を果たさなくなっていた現状でテーバイに協力してスパルタの軍事圧力を直接被る危険性が彼らを慎重にさせていたのである。また、スポドリラス事件が起きた時、カリアスの家に滞在して拘束された三名のスパルタ使節を釈放させたのも対スパルタ戦に慎重なグループの働きによるものであったのだろう。

カッリストラトスを無視することは出来ない。カッリストラトスはアギュッリオスの甥でその政治グループに属していた。そのカッリストラトスがアギュッリオスから独立し、カブリアスと連合して新たに政治グループを立ち上げたのが前三七九〇八年ころだとされている。このカッリストラトスについてシェーファーは反テーバイ派だったといい、シーリーは元々テーバイに友好的だったといい、クロシエは親テーバイ派でもなければ親スパルタ派でもなく、アテーナイの国家利益優先の外交を展開したのだという。シーリーによれば、最初カッリストラトスはカブリアスと連携し海上からスパルタに圧力を加える政策を積極的に推進したが、スパルタとの戦争を戦う過程の中でアテーナイの財政負担の膨らみとテーバイが強大化にアテーナイの世論が変化していくのを敏感に感じ取って平和構築を主導していったのである。

### スパルタの苦悩

第二アテーナイ海上同盟の結成はいわゆるアリストテレスの決議碑文によってはっきりと証言されている。前三七八〇七年、ナウシニコスとアルコンの年、ヒッポトンティス族が担当した第七ブリュタネイアにおいてアリストテレスの提案に基づいて、ペルシア王の支配下にあるもの

を除いて希望する如何なる国も『アテーナイ人並びにその同盟諸国の人々』の同盟、即ち第二アテーナイ海上同盟、に加入できることを決議したのである。特に、決議碑文は加盟国には自由と自治を認め、政治体制選択の権利を保障し、アテーナイが守備隊も司政官も貢税も強制しないことを強調することによってスパルタが自由と自治を侵し平静をかき乱している現状との違いを強調している。アテーナイ人によって同盟諸国内に取得されていた資産の放棄と所有禁止、告発に基づいて同盟会議が違法資産を処分し、同盟国に対する第三者による攻撃に対しては同盟の総力を挙げて支援することを約束している。その上でテーバイに使節を派遣して加入を勧誘することが提案されている。

ディオドロスも第二アテーナイ海上同盟の結成を記述している。ディオドロスによると前三七七〇六年度、カッレアスがアルコンの年に、スパルタの支配下にあった諸都市に自由のために戦うように呼びかける使節を派遣し、キオスやビュザンティオンを初めとするエーゲ海島嶼部の諸都市がこの呼びかけに応え、同盟会議を設立し代表団を任命したのである。同盟会議において全ての同盟諸国が一票を有し、自治権を有し、アテーナイの指揮に従うことが定められた。

この第二アテーナイ海上同盟の結成と同盟諸国の離脱の広がりに対してスパルタは二重の対策を講じなければならなくなった。一つは対同盟国政策の再構築であり、もう一つは深刻化していくポイオーティア戦争の遂行であった。スパルタの対応は外交的手段による同盟国との関係改善であり、テーバイを外交的に孤立化させることであった。後者の鍵となるのはアテーナイだった。エポロス団に代表されるスパルタ本国は『大王の平和』を機軸とするアテーナイとの平和の維持と親スパルタ派を通じてアテーナイをテーバイから切り離しておこうとしたのである。

スポドリラス事件はこの時期のスパルタにおける党派の問題を浮き上

がらせる。スポドリマスはクレオンプロトス派の人物で、クレオンプロトスが前三七九年のポイオーティア遠征に従軍し、テーバイを牽制するために遠征軍の三分の一を託してテスピアイのハルモステスとして任命した人物である。クセノポンによればテーバイ人民民主派に教唆されて、ディオドーロスによればクレオンプロトスに唆されてペイライエウス占領を企てたことになる。スパルタからアテーナイに三名の使節が派遣されている最中にスポドリマスがアテーナイ領に侵攻するというタイミングの悪さ、政治的にクレオンプロトスと対立しているアゲーシラーオスの親しい友人であるクセノポンがクレオンプロトスの関与に全く言及していないことから疑わしいと思われる。むしろこの事件は「無謀で功名心の強い (ouk atolmos men oud' aphilotimos)」スポドリマスの独断専行であったと思われる。

独断でペイライエウス占領を企てたにもかかわらず、その行動は緩慢で、財物を略奪しただけで目的を達することなく引き上げ、アテーナイを激昂させてしまった。スパルタは始まったばかりのポイオーティア戦争を有利に進めるための外交環境を構築しておくことが重要であった。テーバイ民主派を支援した二名の將軍を、一人は処刑しもう一人を追放した行動はテーバイ支援に対するアテーナイの強いためらいを示しており、アテーナイをテーバイから遠ざけておく絶好の機会を提供していたのである。スポドリマスの行為はスパルタの外交的苦境をもたらしたにすぎなかった。当然のことながらエポロスたちはスポドリマスを召還し告発している。

この裁判でクレオンプロトスの友人たちが警戒しなければならなかったのはアゲーシラーオスとその友人たちばかりでなく、中間派の人々であった。アルキダーモスからアゲーシラーオスに働きかけるのに失敗したクレオンプロトスの友人はアゲーシラーオスの友人であるエテュモク

レースに接近し、スポドリマスの行為を犯罪的行為とみなしてはいるがスポドリマスの処刑をアゲーシラーオスは望んでいないことを探り出すのに成功したのである。事実、スポドリマスは召還に応じたにもかかわらず無罪の判決を受けている。

この判決はアテーナイを戦争へと駆り立て、テーバイ支援を積極化させてスパルタを苦境に追い込むことになった。この事件を通してアゲーシラーオスやクレオンプロトスの周りに友人たちが集まり、それぞれ党派を形成し、互いに牽制しながら国政を自派に有利なように活動していたことが明らかとなる。コークウエルはアゲーシラーオスの政治を「支持者への援助 *philētaria*」と特徴付けているが、これはクレオンプロトスにも当てはまる。同時にスパルタ市民の全てがこの二派に収斂していたのではなく、これらの党派の何れにも加担せずに独自の立場を堅持する人々もいたのである。絶大な影響力を有していたアゲーシラーオスですらこれらの人々を考慮しなければならなかった。テーバイ民主派によるクーデタに対してスパルタが動員を決定した時、独裁者たちを援助するために国家を厄介ごと引きずり込もうとしているという批判を浴びせかけられるのを恐れてアゲーシラーオスは遠征軍の指揮を辞退している。

党派の領袖である王は自らの友人や党派の一員を、クレオンプロトスがスポドリマスを、アゲーシラーオスがポイビダスをそれぞれハルモステスに任命したように、枢要な地位につけ、裁判においては党派の総力を挙げて擁護したのである。このことが党派の結束を固めたと言えよう。

プルタルコスにはテーバイ戦に「熱心であるとは思われない (ouch heora prokymon onta)」クレオンプロトスの他にアンタルキダスがアゲーシラーオスに批判的であったことを伝えている。プルタルコスによるとアンタルキダスはアゲーシラーオスの「敵 *echthros*」であった。「望

みもせず戦う術を心得てもいなかった彼らを訓練して、テーバイ人から立派な教訓を受け取られましたね」というアンタルキダスの言葉はアゲーシラーオスの対テーバイ政策に対する批判をうかがわせるエピソードである。このアンタルキダスがスポドリアス裁判のときに問題となる中間派に所属していたのかどうかははっきりとはしないが、前三六九年のエポロスであったことを勘案するとかなりの支持者と同志を伴っていたようである。

スポドリアス事件をめぐるクセノポンの記述はスパルタに三つの党派があつたことを指摘している。<sup>⑤</sup>一つは被告であるスポドリアスが所属するクレオンプロトス派、スポドリアスの友人たちが接触を図り裁判に対するその意向を探ろうとしたアゲーシラーオス派、そして同じくその動向を恐れなければならなかった中間派 (*hoi dia mesou*) である。デーヴィッドはパウサニアス、ナウクレイダス、スキラピダス、プロギダス、アゲーシポリスの支持者たちが中間派を構成し、アンタルキダスとその中に含まれると提案している。<sup>⑥</sup>

テーバイ民主派に対して強硬な政策を主張し、テスピアイを拠点にテーバイの動きを封じ込めようとしたのはアゲーシラーオスであつた。アゲーシラーオスがテスピアイにハルモステスとして同盟軍の指揮を執らせたポイビダスはアゲーシラーオス派の重要人物で、前三八四年にレオンティアダスの手引きでテーバイのアクロポリスを占領したのはこの人物であつた。スパルタをテーバイとの対決へと導いていったのは『大王の平和』の保証人としての地位に固執するアゲーシラーオスの政策であつた。<sup>⑦</sup>コークウエルによると、アゲーシラーオスは民主派に対する不信と各国の「*belistoi*」との仲間意識に基づく連帯を特に重視した政治指導者であつた。エパメイノンダスやペロピダス、メノンらの民主派がレオンティアダスらの寡頭派を惨殺し、スパルタの手からカドメイアを

奪い返し、親スパルタ派が権力を掌握しているオルコメノスやテスピアイなどの近隣諸都市を脅かしている状況を黙視することは出来なかつた。アゲーシラーオスはスパルタの攻撃目標をテーバイに絞る、オルコメノス、テスピアイ、タナグラ、ケドレイアイの親スパルタ諸都市によってテーバイを四方から包囲すると同時に、自らの支持者であるエテュモクレスらにアテーナイに派遣し、アテーナイをテーバイから切り離そうとしたのである。コークウエルは、陸上帝国を志向するアゲーシラーオスが海上における覇権を追求するアテーナイとは両立しようと考え、スパルタが陸上においてヘゲモニーを掌握しアテーナイが海上におけるヘゲモニーを独占する「ヘゲモニーの二元性」を容認していたと言う。<sup>⑧</sup>コークウエルの評価の妥当性については検討の余地があるが、アゲーシラーオスがアテーナイとの外交交渉と連携を重視したことは前三七九年、前三七一年、前三七〇年にアゲーシラーオス派の人物がアテーナイと折衝していることから窺うことが出来る。

このアゲーシラーオスと違った政策を追求したのがクレオンプロトスであつた。兄アゲーシポリスの急死の後を受け、アーギス家の王位を継承したのはクレオンプロトスであつた。クレオンプロトスの政策がスパルタの外交の主流となることはなかつたが、そのような流れから逸脱した外交をスパルタが展開することがあつたが、それを指導したのはクレオンプロトスであつたとスミスは評価している。<sup>⑨</sup>

クレオンプロトスがどのような政策を掲げ、展開したのか史料ははっきりとは語っていない。スミスは兄アゲーシポリスと同じ支持者を率い、テーバイを敵視するアゲーシラーオスに反対したと考え、<sup>⑩</sup>デーヴィッドはクレオンプロトスが父のパウサニアス、兄のアゲーシポリスの反帝国主義政策を踏襲せず、アテーナイをスパルタが戦うべき敵と位置付けテーバイとの和解を提唱する海上帝国派と評価する。<sup>⑪</sup>スミスもデーヴィッ

ドもスポドリアスのペイライエウス襲撃はクレオンプロトスの訓令に基づいたものだったと言う。クレオンプロトスがテーバイとの戦いに熱心でなかったことは明らかであるが、アテーナイを敵視していたとか海上帝国建設の構想を持っていたという証拠はない。海上帝国派とする根拠はスポドリアスがペイライエウス襲撃を企てたということだけである。スポドリアス事件がクレオンプロトスを中心に綿密に計画されたものというよりは、スポドリアスの独断専行だったという側面が強い。しかもアテーナイとの戦いを望んでいたというよりその虚をついてペイライエウスを占領しようというものだった。アテーナイを優勢な艦隊によって海上封鎖しようという意見は同盟国から出たものであり、前三七六年の提督ポッリスも翌年の提督ニコロコスもクレオンプロトス派ではなかった。

しかし、父パウサニアス、兄アゲーシポリスの支持者と路線をクレオンプロトスが継承したのなら、プレイウースの民主派がアゲーシラーオスの包囲を受けながらもアゲーシポリスの仲介に期待をつないだように、クレオンプロトスには同盟諸国の民主派との人脈と民主派に寛容なアーギス家の政策を踏襲してテーバイ民主派に対して同情を寄せていた側面がある。コークウエルによれば、前三七九年と前三七七年の二度に亘るクレオンプロトスのポイオーティア遠征にクレオンプロトスの思惑が良く示されているという。前三七九年の遠征では従軍将兵に遠征的目的について疑問を抱かせるほどの曖昧な行動をとったし、前三七六年の遠征では、アゲーシラーオスが難なく突破してポイオーティアに侵攻したキタイロンの要衝を、アテーナイ側の警戒が嚴重であるという理由で引き返している。このような行動ゆえにクレオンプロトスはテーバイに同情を寄せているのではないかという疑いを受けていたのである。クレオンプロトスによってテスピアイのハルモステスに任命されたスポドリアスがテーバイ民主派に買収されてペイライエウス遠征を企てたという

噂はクレオンプロトスがテーバイ民主派と何らかの関係を持っていると目されていたことを示している。

中間派をデーヴィッドはパウサニアス、アゲーシポリスの系譜を引き、『大王の平和』を構築したアンタルキダスを含む保守志向の強い反帝国派と位置付ける。アゲーシラーオスが二度目のポイオーティア遠征から負傷して引き上げて来るのに遭遇したアンタルキダスがレートラに反して望みもしない敵に無理やり戦いを教えて立派な教訓をもらったという皮肉を述べたという逸話はクレオンプロトス以外にもアゲーシラーオスの強硬なテーバイ政策に批判的な意見があったことを窺わせる。アゲーシラーオスが病の為に作戦指揮が取れず、クレオンプロトスがスポドリアス事件で面目を失い、その消極的な指揮ゆえに同盟諸国の信頼を失ってしまった、主戦場とは言いがたいポキスに派遣されている間に台頭してきたのが第三の党派である。テーバイに直接圧力を掛けるのではなく、テーバイを後方から支えるアテーナイを海上補給の側面から圧力を加えてアテーナイに戦争継続を断念させ、ペルシアの介入によって平和へと導こうというのは正しくコリントス戦争末期に展開されたアンタルキダスの戦略の再現であった。前三七六年の提督ポッリスの政治的立場は不明だが、前三七五年の提督ニコロコスはアンタルキダスに近い人物である。というのはニコロコスは前三七八年にアンタルキダスの副司令官だったからであり、アンタルキダスがペルシア王との交渉をまとめてエーゲ海域まで戻ってくるとアビュドスにおいて艦隊を引き渡しているからである。

## 前三七五年の平和構築への過程

クセノポンは財政負担の圧力がアテーナイをして平和へのイニシアティブを握らせたとし、ディオドロスはエジプトへの遠征を急いだペルシアが傭兵調達のために迫られてギリシアでの平和構築を働きかけたと言っている。しかし交戦国の主要な当事者であるスパルタについては史料は語っていない。

ナクソスでの海戦、アリュゼイアの海戦をつうじてスパルタは大敗北を喫し、エーゲ海、イオニア海の制海権を完全にアテーナイに握られ、ケルキュラでは遠征軍が壊滅するという苦汁をなめ、大軍を率いてポークスに遠征しているクレオンプロトスはその不活発な行動ゆえに戦意を疑われ、スパルタの世論に大きな影響力を有しているアゲーシラーオスは高齢ゆえの健康問題をかかえ、最後のポイオーティア遠征は成果のないまま打ち切らざるを得なかったのである。加えてポイビダスがテーパーイとの戦いで敗死し、テギュラの戦いで敗北を喫し、テーパーイはテスパイヤやオルコメノスまで直接脅かし、スパルタはポイオーティアにおいて守勢に立たされるようになっていた。

スパルタの戦争指導に対する同盟諸国の不満は表面化し、アゲーシラーオスに対しても、クレオンプロトスに対しても批判が集中している。武力によってテーパーイを押さえ込み、親スパルタ派亡命者をテーパーイに帰国させようとする戦争目的を果たせないまま、テスパイヤとオルコメノスに警備の為に少なくともそれぞれに一個モラーのスパルタ本国軍を駐留させ、軍事的には完全に行き詰まりプラタイアやテスパイヤ、オルコメノスを除く諸都市をテーパーイに奪われ、ポークスすらテーパーイの脅威に晒されポークス防衛のためにスパルタはクレオンプロトスに四個モラーの本国軍を派遣し、その継戦能力は破断界に達しており、もはやパ

ルサロス人ポリュダマスの要請に応えることは出来なくなっていた。打開の道すら見出せないままポイオーティア戦争とイオニア海でのアテーナイとの抗争は泥沼に陥っていたのである。

クセノポンはスパルタの平和へのかかわりについて何も語っていない。しかしスパルタが陥っていた苦境についてはパルサロスのポリュダマスの支援要請にかかわる箇所において十分すぎるほど記述している。にもかかわらずスパルタは和平の過程においては受動者に過ぎない。その理由は何故なのか。クセノポンは平和へのイニシアティブがアテーナイであり、専らアテーナイの事情によって平和条約がスパルタと締結されたかのように記述している。

スタイリアヌーはディオドロスの記述を採用し、ペルシア王がイニシアティブを取ってスパルタとアテーナイ双方に働きかけたと考えている。スタイリアヌーはペルシアの関与をクセノポスが故意に省略したのだとする。その理由としてテーパーイを脅迫する為にスパルタもアテーナイもペルシア王という強制力を利用したという事実を隠蔽する為であったというのである。平和構築の過程へのスパルタのかかわりに対してクセノポンは何故素っ気ないのだろうか。恐らく平和がアゲーシラーオス以外の人物の産物であったからであろう。

では誰がスパルタにおける平和への唱道者となったのか。クレオンプロトスは排除されるだろう。確かにクレオンプロトスは戦争に対しては批判的だったが、ポークスに派遣されていて平和構築に関与できる状況ではなかったからである。もし平和への過程がペルシアからの提案に始まったとするなら、スパルタにおいて平和へ積極的に動いたのはペルシアとのパイプを有するアンタルキダスとなる。前三七五年の平和をスタイリアヌーはスパルタとアテーナイの二国間の平和ではなく、一種の共通平和であり、前三八七年の『大王の平和』の更新であったと評価して



いる<sup>⑤</sup>。『大王の平和』を基礎に現状を維持するのはアンタルキダスにとって大きな政治的意味を持つ。加えて前三七六年に採用された戦略は前三七八年の戦略と類似している。海上からの圧力、とりわけアイギーナを拠点とするアッティカ沿岸略奪によってアテーナイを平和へと誘導していくという手法はアンタルキダスが既に『大王の平和』締結の際に用いたものである<sup>⑥</sup>。同盟諸国の声を利用して採用させた対アテーナイ海上封鎖構想<sup>⑦</sup>は十一年前と相通じるところがある。提督としてイオニア海に派遣されたニコロコス<sup>⑧</sup>は既に触れたようにアンタルキダス周辺の人物である。

### 終わりに

前三七五年の平和はアゲーシラーオスの政策の破綻によつてはじまり、クレオンプロトスの作戦指導によつて行き詰まってしまったポイオテーア戦争を側面からアテーナイを切り崩して終戦に持ち込もうというアンタルキダスの構想の産物であった。それはアゲーシラーオスが病気のためにイニシアティブがとれず、クレオンプロトスのポイオテーア戦争に対する姿勢への不信がスパルタ市民の間に高まり、軍事的に行き詰ってしまった状況の中ではじめてアンタルキダスがイニシアティブを行使しうる状況が生まれたのである。しかし、スパルタとアテーナイが協調するには相互の不信感はまだまだ強いものがあり、平和を維持するには基盤が脆弱であった。

- ① Xen. *Hell.* 5. 4. 1-12; D. S. 15. 25. 1-27. 2; Plut. *Pelop.* 6-13; Nepos, *Pelop.* 2-4; Polyaen. 2. 3. 1.  
 ② 前三七九年: Xen. *Hell.* 5. 4. 13; 前三七八年: Xen. *Hell.* 5. 4. 35; D.

S. 15. 32. 1-33. 3; 前三七七年: Xen. *Hell.* 5. 4. 47; D. S. 15. 34. 1-2; 前三七六年: Xen. *Hell.* 5. 4. 59.

- ③ Isoc. *Plat.* 13: テスピアイがスパルタの重要な戦略拠点であったことはイソクラテスの『プラタイコス』からも明らかである。プラタイアの使節はテスピアイにハルモステス、駐留部隊のほかに大部隊をスパルタが配備していることを指摘している。Cf. J. Buckler, *The Theban Hegemony, 371-362 BC*, Cambridge, Massachusetts & London, 1980, 12. スパルタはテスピアイを軍事基地として利用しただけではなく、その港クレウシスをコミュニケーションの軸として利用した。

ハルモステスのスポドリマス: Xen. *Hell.* 5. 4. 15; ポイビダス: Xen. *Hell.* 5. 4. 41. このような重要な指揮官職にクレオンプロトスもアゲーシラーオスも自らの重要なブレンとなる支持者から選んだことは、オリュントス遠征に指揮官として任命されたポイビダス、エウダミダス、テレウティアスの何れもがアゲーシラーオスの関係者であったことから領けよう。ポイビダスはアゲーシラーオスの支持者であり、エウダミダスはポイビダスの兄弟で(Xen. *Hell.* 5. 2. 24)アゲーシラーオスの息子アルキダーモスの岳父であり、テレウティアスはアゲーシラーオスの血のつながりの無い兄弟であった(Xen. *Hell.* 4. 4. 19; Plut. *Ages.* 21. 1)。アゲーシポリスの死後ハルモステスとしてトラキアに派遣されたポリュビアデスはリュサンドロスに反対してパウサニアスを支持したエポロスのナウクレイダスの息子であった(Xen. *Hell.* 2. 4. 29; 36; 5. 3. 20)。

- ④ Xen. *Hell.* 5. 4. 44; D. S. 15. 33. 6.  
 ⑤ 最初アテーナイはテーバイ人亡命者に協力した二名の將軍を処罰している: Xen. *Hell.* 5. 4. 19. しかしスパルタによるスポドリマス事件の処置に不満を抱いたアテーナイはテーバイ支援に積極化すると同時に海上での攻勢にも着手したのである: Xen. *Hell.* 5. 4. 34. デイオドロスはスポドリマス事件を第二アテーナイ海上同盟結成より後に置いている: D. S. 15. 29. 5-6. このデイオドロスに記述を基にコークウェルはスポドリマス事件を第二アテーナイ海上同盟結成に対する反応だとし、アゲーシラーオスがエテュモクレースを使節としてアテーナイに派遣したのはこの件に対するアゲーシラーオスの違った対応を示すものだとしている。

- る。アテーナイへの使節派遣及びスボドリアス事件を第二アテーナイ海上同盟結成より後に置くコークウエルのクロノロジーについては賛同を要す。 Cf. G. L. Cawkwell, "Agesilaus and Sparta", *CP* 26 (1976), 79.
- ⑨ D. S. 15. 28. 1-3. cf. *Isoc. Plat.* 18, 21.
- ⑩ Tod II 123, 1; 4-5; Bengtson, 257, 1; 4-5; I. G. II/III<sup>2</sup> 43, 1; 4-5.
- ⑪ H. Bengtson, *Die Staatsverträge des Altertums II*, 1962, München/Berlin, S. 210.
- ⑫ D. S. 15. 28. 2.
- ⑬ Tod II 123, 72-75.
- ⑭ D. S. 15. 28. 2; Tod II 123, 9-15: 碑文はスパルタが「自由かつ自主独立の権利を有するギリシア人たちが平和を享受し彼ら全てが国土を確固として保持するのをそっとしておいてくれますようにそしてギリシア人とペルシア王が条約に従って誓いを立てた共通平和が効力を有し永続しますように」と同盟結成の目的を規定している。
- ⑮ D. S. 15. 30. 5-31. 1.
- ⑯ D. S. 15. 34. 3-6.
- ⑰ Xen. *Hell.* 5. 4. 59.
- ⑱ D. S. 15. 37. 1.
- ⑲ Xen. *Hell.* 5. 4. 64-65; D. S. 15. 36. 5.
- ⑳ Xen. *Hell.* 5. 4. 66.
- ㉑ Xen. *Hell.* 6. 1. 1. シロトホはテーバイのポーキスへの攻撃、クレオンプロトスの派遣、ポリュタマスの懇願を前三七一年に属するとしている。シロトホ説に対する疑問については R. Sealey, "IG II<sup>2</sup>. 1609 and the Transformation of the Second Athenian Sea-League", *Phoenix* 11 (1957), 103.
- ㉒ Xen. *Hell.* 6. 1. 17.
- ㉓ Xen. *Hell.* 5. 4. 60.
- ㉔ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㉕ D. S. 15. 38. 1.
- ㉖ D. S. 15. 38. 3. cf. Xen. *Hell.* 6. 3. 18; D. S. 15. 50. 4.
- ㉗ Xen. *Hell.* 5. 4. 34.

- ㉘ Xen. *Hell.* 5. 4. 63-66.
- ㉙ Xen. *Hell.* 5. 4. 64-65.
- ㉚ Xen. *Hell.* 5. 4. 66.
- ㉛ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㉜ Xen. *Hell.* 5. 4. 66.
- ㉝ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㉞ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㉟ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㊱ Buckler, 1980, 20-21.
- ㊲ Buckler, 1980, 19-20.
- ㊳ Thuc. 1. 19.
- ㊴ Xen. *Hell.* 5. 4. 46. 「親スパルタ派」「反スパルタ派」の用語については森谷公俊「第二次海上同盟期アテネの政治と外交（前三七七―三五五年）」『史学雑誌』九二―一（一九八三年）、三頁の批判的検討を参照。
- ㊵ Xen. *Hell.* 5. 4. 49.
- ㊶ Xen. *Hell.* 5. 4. 14. イソクラテスはプラタイアがスパルタの同盟国であつたことを述べている。 *Isoc. Plat.* 11.
- ㊷ Xen. *Hell.* 5. 4. 46.
- ㊸ Xen. *Hell.* 5. 4. 55.
- ㊹ *Isoc. Plat.* 9; 16: イソクラテスはプラタイアの他にテスピアイやタナグラ、オルコメノスがテーバイと対立しており、スパルタとの同盟がテーバイの圧力からプラタイアのような小都市の自治を守る為の保障となる可能性を指摘している。
- ㊺ Xen. *Hell.* 5. 4. 2-7; 19.
- ㊻ Xen. *Hell.* 5. 4. 12.
- ㊼ Xen. *Hell.* 5. 4. 14.
- ㊽ S. C. Backhuizen, 1994, "Thebes and Boeotia in the fourth century B. C.", *Phoenix* 48, p.320.
- ㊾ *Isoc. Plat.* 29.
- ㊿ Xen. *Hell.* 5. 4. 34. 前四世紀のアテーナイが社会的にも経済的にも安定しており、政治家が中産階層出身者に占められていたアテーナイでは階層による政策の違いはなかった。 S. Perlman, "The Politicians in the

- Athenian Democracy of the Fourth Century B. C.", *Athenaemum* 41 (1963), 327-55. 前四世紀の政治家の足跡について M. H. Hansen, "The Athenian Politicians", 403-322 B. C.", *GRBS* 24 (1983), 33-55. 参照のこと。
- ⑭ Xen. *Hell.* 5. 4. 9-12; 19.
- ⑮ P. J. Rhodes and R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC.*, Oxford, 2003, 22, 72-77.
- ⑯ Rhodes and Osborne, 2003, p.103; Aesch. 3. 138-9.
- ⑰ Tod II 121, 19-20.
- ⑱ Tod II 124, 7.
- ⑲ Plut. *Alc.* 36. 1-2. コリントス区出身。ステイリア区のトランシブロースは別人。
- ⑳ Xen. *Hell.* 5. 4. 19.
- ㉑ Cf. Xen. *Hell.* 5. 4. 19.
- ㉒ Xen. *Hell.* 5. 4. 23. カートリッピンにすれば、アテナイには強力な反ヘーンベ・ロマーが存在した。P. Cartledge, *Agessilaos and the Crisis of Sparta*, London, 1987, 297.
- ㉓ A. Schaefer, *Demosthenes und seine Zeit*, 12, Leipzig, 1886, 14-15.
- ㉔ R. Sealey, "Callistratos of Aphidna and his Contemporaries", *Hist.* 5 (1956), 178.
- ㉕ P. Cloché, "La Politique de l'athénien Callistratos (391 – 361 avant J.-C.)", *REA* 25 (1923), 8-14.
- ㉖ Sealey, 1956, 187-192.
- ㉗ Tod. 123. 1.1
- ㉘ Ll.4-5.
- ㉙ Ll.15-19.
- ㉚ Ll.19-23. cf. ll.9-12.
- ㉛ Ll.25-46.
- ㉜ Ll.46-51.
- ㉝ Ll.72-77.
- ㉞ D. S. 15. 28. 2-3.
- ②⑨ D. S. 15. 28. 4.
- ②⑩ Xen. *Hell.* 5. 4. 15.
- ②⑪ D. S. 15. 29. 5: epeisen auton Kleombrotos ho basileus ton Lakedaimonion aneu tes gnomes ton ephoron katalabesthai ton Peiraia (彼をエペロイたちに知られなごペイライエウスを奪取するよごにラケダイモン人の王クレオンプロトスが説得した)。Cf. Xen. *Hell.* 5. 4. 20.
- ②⑫ クセノポンはスポドリマスがテーバイ人に唆られて事件を起したのではないかという疑惑があった (hos hypopteuto) ことを伝えるがクレオンプロトスの関与については触れていない。クレオンプロトスの指示に従ってスポドリマスが事件を企てたというディオドロスの記事はプルタルコスが伝えるカドメシア占領にアゲーシラーオスが関与しているのではないかという疑惑 (hyponoia) に影響されて作られた話ではないかと思われる。Cf. Plut. *Ages.* 24. 1. プルタルコスはポイビダス事件の疑惑を語った後、スポドリマス事件がテーバイ人の陰謀であったという噂話に言及している (legousi de touto mechanema genesthai ton peri Pelopidan kai Melona boiotarchon)。Plut. *Ages.* 24. 6.
- ②⑬ Plut. *Ages.* 24. 4.
- ②⑭ Xen. *Hell.* 5. 4. 19.
- ②⑮ Xen. *Hell.* 5. 4. 24.
- ②⑯ Xen. *Hell.* 5. 4. 25.
- ②⑰ Xen. *Hell.* 5. 4. 32.
- ②⑱ Xen. *Hell.* 5. 4. 24.
- ②⑲ Xen. *Hell.* 5. 4. 34.
- ②⑳ Cawkwell, 1976, 62; 77.
- ㉑ Xen. *Hell.* 5. 4. 13.
- ㉒ ベルテントス: Xen. *Hell.* 5. 4. 15; ベュクタス: Xen. *Hell.* 5. 4. 41.
- ㉓ Plut. *Ages.* 26. 2.
- ㉔ Plut. *Ages.* 23. 3.
- ㉕ Plut. *Ages.* 23. 3.
- ㉖ Cf. R. E. Smith, "The Opposition to Agesilaus' Foreign Policy 394-

- 371 B.C.", *Hist.* 2 (1953/4), 274-288. スミスはテーバイを敵視し陸上帝国を志向するアゲーシラーオス派とアテーナイを敵視し海上帝国を希求するクレオンプロトス派の二派を想定し、アンタルキダスを反アゲーシラーオス派とみなす考えに反対している。
- ⑧ E. David, *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): Internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, Salem, 1986<sup>rev.</sup>, 35.
- ⑨ Smith, 1953/4, 274-5.
- ⑩ Cawkwell, 1976, 79.
- ⑪ Smith, 1953/4, 274.
- ⑫ Smith, 1953/4, 280.
- ⑬ David, 1986, 32; 34.
- ⑭ Smith, 1953/4, 280. David, 1986, 32. cf. D. S. 15. 29. 5.
- ⑮ Xen. *Hell.* 5. 4. 59; 6. 4. 5.
- ⑯ Xen. *Hell.* 5. 4. 21.
- ⑰ Xen. *Hell.* 5. 4. 60.
- ⑱ Xen. *Hell.* 5. 4. 16.
- ⑲ Xen. *Hell.* 5. 4. 59; Cawkwell, 1976, 78.
- ⑳ Cawkwell, 1976, 78.
- ㉑ コークウエルは D. S. 15. 29. 5 に基づいてスポドリアスがクレオンプロトスの指示に従ってペイライエウス攻略を企てたという。Cawkwell, 1976, 78.
- ㉒ David, 1986, 35.
- ㉓ 前三七六年にアテーナイの海上封鎖を試みカブリアス指揮下のアテーナイ艦隊とナクソス沖で海戦を戦った (Xen. *Hell.* 5. 4. 61; D. S. 15. 34. 3-5) ポッリスは前三九三年にはポタネモスの副官 (epistoleus) であった。Xen. *Hell.* 4. 8. 11.
- ㉔ Xen. *Hell.* 5. 1. 6.
- ㉕ Xen. *Hell.* 5. 1. 25.
- ㉖ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㉗ D. S. 15. 38. 1.
- ㉘ Xen. *Hell.* 5. 4. 45.
- ㉙ Plut. *Ages.* 27; *Pelop.* 16-17; D. S. 15. 37. 1-2; 81. 2.
- ㉚ Plut. *Ages.* 26.
- ㉛ Xen. *Hell.* 5. 4. 60.
- ㉜  $\chi\epsilon\iota\mu\iota\tau\epsilon\iota\sigma\iota\sigma\iota\tau\epsilon\iota\varsigma$ : Xen. *Hell.* 5. 4. 46. ホルコメノスに  $\tau\iota\sigma\iota\tau\epsilon\iota\varsigma$ : Plut. *Pelop.* 17. 3. cf. D. S. 15. 37. 1.
- ㉝ Xen. *Hell.* 5. 4. 63.
- ㉞ Xen. *Hell.* 6. 1. 1.
- ㉟ Xen. *Hell.* 6. 1. 17.
- ㊱ Xen. *Hell.* 6. 1. 2-19.
- ㊲ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ㊳ P. J. Stylianou, *A Historical Commentary on Diodorus Siculus Book 15*, Oxford, 1998, 320.
- ㊴ Xen. *Hell.* 5. 1. 28. アンタルキダスはアリオバルザネスの賓客であった。
- ㊵ Stylianou, 1998, 321.
- ㊶ Xen. *Hell.* 5. 1. 27-29; 6. 2. 1. タセノポンはアイギーナを拠点とする略奪がアテーナイをして『大王の平和』を受け入れる重要な動機となつてゐることを指摘し、前三七五年の平和に関してもアイギーナを拠点とする略奪を平和への重要な動機の一つにしている。
- ㊷ Xen. *Hell.* 5. 4. 60-61. (同志社大学教授)